EBM

保育所内企業を実践 実証

シングル、共働き 働きやすい環境

FIST内の託児スペースで遊ぶ子ども

イービーエムは2023（令和5）年度から、福島市の拠点施設FIST内に保育施設を設け、従業員が勤務時間内に託児できる「企業内保育」の体制を整えた。FISTには子育て世代の女性従業員が多く勤務している。オフィスの一角を改装し、子ども用の遊具やトイレを設けた。調理施設などの整備も進めている。

朴栄光社長自身が「ツレワーク」と称し、自身の子どもと一緒に出社。勤務時間中、子どもたちは託児スペースで元気に過ごしている。

医療関連製品を製造しているFIST内のワークスペースと、子ども用のおもちゃや絵本、積み木などが置かれた託児スペースは強化ガラスのパーテーションで仕切られている。安全性を保つとともに、従業員が仕事に励みながら子どもの姿を確認できる。

イービーエムは福島市への進出後、子育て世代の女性の雇用を進めている。FISTには現在、女性10人が勤務する。本県は2021（令和3）年までの10年間で転出による女性減少数が都道府県別でワースト1位となっており、女性が活躍できる環境づくりが大きな課題となっている。

イービーエムは子どもが常に近くにいる環境をつくることで従業員の就業意欲を高めるとともに、保育所への送迎時間などを短縮することで業務効率の向上を目指している。朴社長は「企業内保育というより保育所内企業を目指している。親の背中を見ることは子どもにとっても社会や仕事をいち早く理解する絶好の機会。新時代のエリート養成のヒントになりうる」と、意義を語る。

FISTでの取り組みは、福島労働局の視察を受けるなど、今後、新しい形の職場環境として官民連携での推進も期待される。今後も女性が働きやすい環境をPRし、シングルマザーや共働き世帯などからの新規雇用を見込んでいる。

子育て対談

イービーエム 朴社長
こじか「子どもの家」 佐々木氏

自主性伸ばす幼児教育

イービーエムを「保育所内企業」と称し、子育て環境の重要性を訴える朴栄光（ぱく・よんがん）社長は、発達障害のある乳幼児とリスク児（将来発達が遅れる可能性のある子ども）を支援している福島市方木田の発達支援センター「こじか『子どもの家』」の佐々木景園長と対談し、子どもの自主性を伸ばす幼児教育のあり方などに意見を交わした。

朴社長　佐々木さんが園長を務めるこじか子どもの家を訪れると、子どもたちが自立して生活している社会がみてとれて、頼もしく、たくましいと感じました。

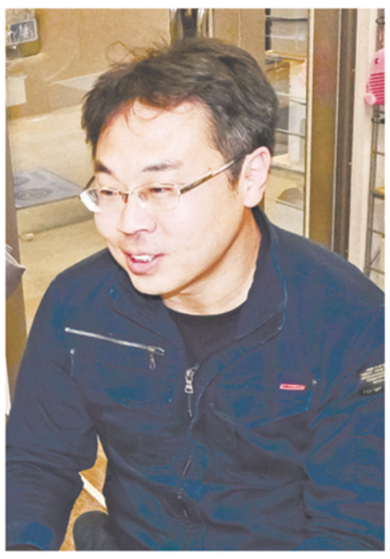
佐々木氏　子どもたちは一人一人が自立したいという気持ちが非常に強いんです。その気持ちを支援するのが、こじか子どもの家です。子どもは人格を持った一人の人間だと捉えています。極端に言えば、胎児の時から既に自立していると考えています。

朴社長　子どもは純真無垢な状態で生まれてくるから、大人が全て教えてあげなければならないと思ってしまいがちです。

佐々木氏　子どもは親とは別人格で、実は自分のペースで生まれてくるんです。帝王切開は別ですが自然分娩に関しては、赤ちゃんは生まれ落ちるタイミングを自身の成長度合いで決めているんです。母親が自分の思惑通りに出産の日を決めることはできないですよね。

朴社長　私自身もそうですが、親は子どもに将来、こういう人生を歩んでほしい、幸せになってほしいと考えすぎる時があります。これが過度になると子どもを縛ってしまいます。独立した人格である子どもにとって、どのような形のサポートが望ましいのでしょうか。

佐々木氏　まず、よく子どもを観察することが大事です。今、この子は何を成長・発達させようとしているのか。何が本当に必要な手助けなのか。手助けするのではなく、見守るべきなのか。子どもの姿を観ることで、ヒントが出てきます。より良い人間になりたいと、どんな子どもでも思っています。どんなに重い障害を持って生まれても同様です。



朴社長　先生が多くの子どもたちを観察してきた中でのエピソードを聞かせてください。

佐々木氏　私は障害のあるお子さんと接する機会が多いのですが、その中に5歳まで首が据わらなかった子がいました。数年間、リハビリに通って寝返りの練習をしていましたが成果が出ませんでした。私はその子が興味を引くことを探し、いろんな物を触らせてみたり、見せたり、音を聞かせたりしました。その中で一番反応が良かったのが和太鼓の音でした。

朴社長　楽器の和太鼓ですか。

佐々木氏　興味のない事象には目を開けない子でした。和太鼓の音が鳴った途端に、ぱっと目を開いて、どこで鳴っているかを知ろうと首を動かして見つけようとしました。音を聞かせるだけじゃなく、和太鼓の皮を触らせるようにすると、自分から不自由な手を和太鼓の方に伸ばし始めたんです。少しずつ和太鼓を離していくと、自ら寝返りをしました。

朴社長　数年間、リハビリの先生が一生懸命に練習をさせても、なかなか寝返りをうたなかったんですよね。

佐々木氏　子どもが寝返りという運動機能を獲得した時、自分を成長、発達させたいために能力を育んでいると実感しました。

朴社長　考えさせられるものがあります。今までは目を閉じてばかり、そして動かしてもらってばかりだったのに、自分の力で世界を広げようとした。それまでは一方的に「あなたはこれをしなさい」という宿題を毎日課せられていたわけですね。できないことを突きつけられると、大人でも自分が見えなくなりますよね。

佐々木氏　体が不自由なお子さんに関しては、運動訓練という取り組みは必須ではあります。しかし、そればかりに偏ると、本来の子どもが自分で自分を成長させる機会を奪いかねません。だから自己評価が下がり、自信も失う。そうすると反抗的な態度になってしまう。その繰り返しの中で生きている子どもたちは結構多いかもしれません。

朴社長　一度そうなってしまうと、コミュニケーションを取っていくのが大変になりますね。

佐々木氏　日本で生まれ、日本で育ち、学校教育を受けるという中で古くからの価値観が染み付いている。それを変えなければ、子どもの教育に携わる真の教育者にはなれないと考えています。

朴社長　子育てのゴールは、子どもが独り立ちをするときですよね。ゴールを大人が決めてしまうと、子どもはそれに向けて動くけれども、本質からずれてしまうと感じます。

佐々木氏　親が押し付けてしまったり、威圧的になってしまったりすると、子育ての中で親も成長する「親育ち」を経験できなくなると思います。

朴社長　子どもという「願いの塊」の存在がいることで、親も成長できるチャンスがあるのですね。話は変わりますが、子どもの成長を促す環境づくりについての考えを伺います。

佐々木氏　学校や保育園に、家庭生活に近い環境をつくってあげることですね。こじか子どもの家は子ども仕様で、子どもが使いやすいことを徹底した環境を提供しています。子どもは模倣期があり、母親や父親のそぶりをまねます。家事や仕事を見て、同じようにやってみたい気持ちが芽生えてきます。

朴社長　お母さんが台所に立つ姿を見て、料理を作ったり配膳したりしたいという欲求が出てくるわけですね。ただ、それをそのまま子どもに任せるのは、ハードルが高いですね。

佐々木氏　母親が目を離した隙に牛乳パックから自分のコップに注いでみたら、パックが重くてこぼしてしまうことなどはよくあります。これからの生活に必要な動作を学ぼうと挑戦するんですが、失敗して親に怒られてしまいます。

朴社長　怒られた、で終わっちゃうわけですね。

佐々木氏　そこで、小さめの入れ物に牛乳を入れ代えておいてあげると、子どもは自分の手のサイズにあったもので、注ぐことができ、成功体験が味わえます。それから、失敗も大切です。失敗したらどう解決すべきかということも、子どもの家では伝えています。

朴社長　例えば、牛乳をこぼした場合はどういった対応をしますか。

佐々木氏　子どものサイズの台ふきんを準備しておきます。失敗したら拭けば良い、また次に挑戦すればいいわけです。失敗しても大丈夫だという経験をさせていくのがすごく大事です。

朴社長　成功体験だけを積み重ねていくと、確かに良い子にはなりそうですが、失敗してしまったときに全部投げ出したくなったりしそうですよね。自分自身で解決できるというのも重要ですね。自分の子どもを見ていても、やはり失敗したときに、癇癪（かんしゃく）を起こしてしまいます。失敗を経験していると、落ち着いて対処できますよね。大人にも共通点があります。

佐々木氏　幼いときは取り返しのつく失敗ができるんです。これが大人になると失敗を不安視したり、ミスをすると自信を失って前に進めなくなったりする。子どもの時代に多くの失敗を経験してもらいたいです。

朴社長　私は起業家でもあるので、よく大学の講義とか、セミナーに呼ばれます。「失敗を恐れるな」などという講演をたくさん聴きます。実現するのであれば、幼児期にたくさん失敗させてあげるべきではないでしょうか。その時に「こうやって取り返せばいいんだよ」と大人がサポートしていけば、失敗への耐性が付く気がします。

佐々木氏　もうひとつ大切なのは、意欲です。やりたいからこそ、失敗しても再挑戦する。そして、自分の成長を確認できる。そういう積み重ねこそが、子どもを育てることにつながると思います。

朴社長　子どもが幼い頃、歩けるようになった時を思い返すと、転んでも転んでも挑戦していました。子どもは絶対にあきらめない。そういう時は顔や体、視線などをよく見てあげると、子どもが一生懸命やろうとしているのが伝わってきますね。

佐々木氏　世界を広げていくために、自分の足で歩く。親御さんには、子どもは素晴らしいことを教えてもらうのではなく、自分で獲得しているということを忘れないでもらいたいです。

イービーエム航空事業拡大

イービーエムの朴栄光社長は、航空従事者技能証明（パイロットライセンス）を所持している。免許取得の動機は、一つのミスが命に関わるという点で飛行機の操縦と外科手術に共通点をみたからだ。

航空業界では、パイロットが飛行時間や訓練の履歴をログブックへ記入することが義務付けられ、より安全な飛行に役立てられている。定期的に緊張感のある飛行訓練に取り組んでいる朴社長は、航空業界の安全を維持するシステムそのものを医療機器の開発に生かしている。

朴社長の飛行訓練の様子

イービーエムは2022（令和4）年、ダイアモンドエアクラフトインダストリーズ社製の4人乗り小型双発飛行機「DA42 TWIN STAR」を自社の専用機として導入した。

同社は自社開発の医療訓練用のシミュレーターを使った医師の技術訓練講習会などを全国各地で開催している。分単位のスケジュールで動く多忙な医師の移動時間を短縮するために、朴社長自身が操縦桿を握って送迎するケースもある。自社製品をいち早く届ける場合にも各地方空港を活用してフライトしている。

将来的に、大規模自然災害が発生した際に孤立した被災地などに医師や医薬品などを届ける航空事業の展開なども視野に入れている。

医師の働き方改革に対応

臨床工学技士の告示研修請け負う

EBM羽田医療技能訓練所で告示研修に臨む臨床工学技士

イービーエムは自社開発のシミュレーターを活用し、医療従事者が技術を磨くプログラムや訓練環境を一元的に提供する「医療ロジスティクス事業」を手がけている。医療法改正を受け、業務での医療行為の幅が広がった臨床工学技士の告示研修プログラムを2021（令和3）年から提供している。

臨床工学技士の資格は現在、国内で約3万8千人が有している。これまでの手術で医師が担っていた内視鏡カメラの操作や薬液の投与、抜針や止血などの医療行為を臨床工学技士が担当することとなり、厚生労働省が定める告示研修の受講が義務付けられた。イービーエムは日本臨床工学技士会の依頼を受け、告示研修で使用する模擬医療機器の開発と、一連の訓練プログラムの作成・提供を手がけている。

国は2027年までに研修を完了させる方針を示している。イービーエムは大規模な実技研修を行うため、東京都大田区の羽田空港の近隣にある羽田イノベーションシティ内に延べ床面積約500平方㍍の訓練施設「EBM羽田医療技能訓練所」を整備し、1度で約100人の告示研修を実施できる環境を整えた。

イービーエムは内視鏡カメラの操作を本番の手術同様に再現できるシミュレーターを独自に開発した。研修では、このシミュレーターと訓練プログラムを用い、手技の正確性が基準に達しているかどうかを判断している。

告示研修は訓練所のほか、全国各地の会場でも定期的に行っている。研修に用いるシミュレーターなどの訓練機器一式は特殊なコンテナ梱包をし、トラックに積んで各会場に運び込んでいる。時には、朴栄光社長自らがトラックのハンドルを握るケースも。緊急時には朴社長が自社飛行機を操縦し、会場最寄りの空港へのロングフライトを行っている。

日本臨床工学技士会によると、2023年12月末時点で1万3465人が研修を修了した。2024年4月から医師の勤務時間や残業時間が制限される「医師の働き方改革」が始まる。イービーエムによる医療従事者の技能向上に向けた一連の取り組みは安心・安全な医療を提供する環境づくりに大きく貢献している。